

昔話のユング的解釈・その一 ——怠け者の話——



河合 隼雄

はじめに

今年の三月に、お茶の水女子大学児童学科において、おとき話に対するユング派の観点からの解釈について、集中講義を行なった。

このようなことは前々から興味をもっていたが、他に発表する機会もないままでいたら、お茶の水大学からの要請があったので、話を試みる気になった。ところが、風邪で寝こんでいたことや、考えが明確になり切っていない点もあって、準備不足のままに勝手なおしゃべりをしてしまうようなことになってしまった。全く申し訳ないことと思っていたら、凶らずも、児童学科の本田和子先生より、講義のテープを児童学科の学生さん

たちが文字にしたので、その一部を本誌に発表してはという依頼があった。

前述したようなわけで、筆者としては、このようなものを発表するのは恥ずかしい気もするが、児童学科の方々の折角のご好意を無にすることも申し訳ないし、少し訂正して発表させていただくことにした。ずいぶんと脱線してつまらぬことをしゃべったり、大たんなことを不用意にのべたりしているが、折角、逐語的に文字化してくださったお気持ちもくんで、なるべくそのままにしておくことにした。この点、読者の方のご寛恕をお願いする。

なお、集中講義の一部をここに発表させていただくので、おとき話の研究についての歴史や、ユング派の考えや方法論など

については省略することになるが、いずれ、このあたりのこと
も明確にして、形をととのえて発表したいと思っている。

このような機会を与えてくださった、お茶の水女子大学児童
学科の方々、特に、津守真、本田和子の両先生、および、筆者
の早口の講義のテープを文字化してくださった学生さんたちに、
心からお礼申上げる。

怠け者の話

今からする話は怠け者の話です。(笑い) おとき話の研究法
としては、一つのおとき話について徹底的に研究する方法、そ
れからも一つの方法として、怠け者なら怠け者という一つの
テーマについて、それを調べていく方法があります。

今から言う「怠け者」の話というのは実は私がユング研究所
におりました時、分析家の資格をとるためにいろいろな試験が
あるのですが、その中におとき話の研究という科目がありまし
て、試験を受けたりレポートを書かされたりするのですが、そ
の時書いたレポートなのです。なぜ怠け者を選んだか皆さんわ
かると思います。私自身怠け者ですのだからかきいレポート
を書けなくて困っていたのですが、結局のところ、怠けること

はよい意味があるんだということを立証しようとして(笑い)
一生懸命書いた、そういうレポートです。

さて、昨日から言っていますように、おとき話の中では、良
いやつは良い、悪いやつは悪いと非常にはつきりしていますね。
だから中にはおとき話というのは非常に教訓的の意味があると思
っている人があります。つまりわれわれの知っている言葉でい
うと、特に徳川時代にそういうことはとり上げられました、
勸善懲悪ということがありますね。勸善懲悪ですべてのおとき
話ができていると思っている人がありますが、それは大間違い
です。悪者が大いに栄えることもあるのですね。たしかに、儒
教の影響を受けまして、勸善懲悪的な色彩というのはおとき話
の中にたくさん入っています。もちろん、時代時代によって変
遷してきたのだと思いますが、みますと全然勸善懲悪的で
ない話もあります。たとえば日本の昔話でしたら『ばくろうや
そ八』というのがありますね。ばくろの好きな話ですが。ばくろ
うのやそ八というのが悪いことばかりしてましたりなんかい
っぱいして、最後に長者になりましたで終わるわけです。つま
り、悪者の成功する話なのです。

その一・勇敢なるチビの仕立屋

次に、たとえばグリムの『勇敢なるチビの仕立屋』というのを知っていますか。ほとんどの人が知っていると思います。『勇敢なるチビの仕立屋』というのは、一打ち七つというやつです。小さいチビの仕立屋がはえがあまりとまるので、バーンとやったら一遍に七匹やつけたのですね。なんとおれは勇敢なんだろうと感激して、ここに「一打ち」というしるしをつけて旅に出かけるのです。そこはまあ日本と違うところで、日本だったら一打七匹、と書いたら人間でないことがわかるのですが、西洋にはそんな匹、などというのなから、みんな七人やつけたと思うんですね。すごい勇者がやってきたと思って間違われて、その誤解を利用してだんだん偉くなっていくのです。ところが、考えてみるとあのチビの仕立屋は、敵をやっつけるためにうそでだますか何かずるいことをするか、そんなことばかりやっているのです。何も勇敢でないのですが、結構勇敢だということとちゃんと成功していくわけです。そんな話をぼくら子どもの時読むと、ものすごくおもしろいし、チビの仕立屋のやることに大喜びしたわけです。しかし、考えてみると、うそをついてはいけませんということが大切だとすると、チビの仕立屋なんて大うそつきの太鼓だということですよ。

おとぎ話の主人公というのは非常にずるいことをして、だま

したりしますが、そういうことに皆ほとんど心がとがめない。そしてうまいこといきよつたと思つて喜びますね。ところがこんな勇敢な仕立屋などはものすごく悪いやつじゃないか、うそをついてはいけないということをどう考えるのか、つまりよいやつはうそをついてもいいけれども、悪いやつはついたらいけなひのか、などという質問をする子どもがいたら皆さんはどう答えますか。もし聞く子があつたらなかなか頭のいい子です。時々そういう子がいます。ぼくはおとぎ話が好きなんですけれど、時々非常に不思議になつてくるのです。こんなもの皆喜んでるけど、主人公を悪人と考えられないのか、その点を考えてましたら、つじつまがあつていふようであつていない話がたくさんあつて、それが不思議で不思議でしかたがなかつたのです。

その二・三年寝太郎

さて、その一つの例として、怠け者がむちゃくちゃに得する話というのがあります。たとえば非常に有名な話ですけど、みんなが知っている『三年寝太郎』というのはその最たる話です。『三年寝太郎』はいろいろなバリエーションがありますが、簡単に言いますと、昔あるところに二軒の家が並んでた。東の家はたいした大尽だいじんであつたが、西の家は貧乏でごく小さなあ

ばら屋であった。西の貧乏屋では父親が先に死んでお父さんがいないのです。母親と一人息子がくらしていた。この「母親と一人息子」という組合せは、昔話によくある話で、明日の講義でもそのテーマが何遍もでてくると思います。母一人子一人というのは本当に大切なテーマですね。で、母親と一人息子とが住んでいた。その息子は大変な怠け者で、毎日毎日何もせず、ただ食っちゃ寝食っちゃ寝してばかりいたので、世間ではその息子のことをクツチャネと呼んでいた。(笑い) ドイツ語みたいな名前ですけど(笑い) 母親も見るにみかねて、「われもい加減にかせがないば困るじゃないか」と時々世話をやいてみたが息子はその度に、なあにおつかあ、これでもかんべん(考)えのことです(ね)があるんだといって相変わらず食っては寝てばかりいた。と、こういうふうにもものすごいものぐさです。

この『三年寝太郎』とか『ものぐさ太郎』という話はご存知でしょう。食べようと思つたみかんが手からころげ落ちて、ころころ転がってそれをとるのがうるさい、通る人がとつてくれないかと、待つていた有名な話があります。実際われわれも同じで、皆さんはどうか知りませんが、ぼくは完全にそうです。仕事をしている時に、字引をひけばわかるのに、それが手の届く範囲になかったら、その字引をとるかとするまいかと思つて一

時間ぐらい考えます。それをひいたらわかるんだけど、それもうるさいし、誰か子どもにでもとつてもらおうと、大きい声を出して呼ぶのもじゃまくさいし、来るかなと待ったりするうちに一時間たつて、そしておもしろいことには、字引をとるかとするまいか一時間ほど考えているけども、ちよつとお茶でものみたいなと思つたらざーっと下に降りていって(笑い) また二階へ上がつてきてすわる。あつ、しまった、字引をとるのだつたと思つても、もうすわつてしまつたら終りですね。また機会があるまで待つていなければならぬ。だからぼくはそういう気持ちには非常によくわかります。こういう気持ちのわからない人は、この話は全然わかりません。みんなある程度わかると思っています。それほどひどくはないにしても、ある程度、そういう気持ちには人間である限りあると思います。

ところが、この「くつちゃね」の男が二十一歳になると大活躍します。どうなるかといえますと、二十一歳になつたらお母さんに烏帽子と神主の服を買つてきてもらうのです。そして烏帽子をかぶつて、ちゃんと神主の格好をして、そして東の大尽、大金持の家にそつとしのび込んで神棚の上にあがつて隠れておるのです。そして夕飯時にドスンと飛び降りる。そして、おまえはいったい何者かと尋ねると、そのクツチャネがですよ、

つくり声をして、おれはところの氏神だと。きさまのところの娘と西の家の息子とはできるときから祝いあわせてあるによつてすぐに夫婦にしろ、もししないならば二人を黒土にしてしま

うぞと言うわけですね。それで皆驚いている間にさあつと逃げ
て帰ってくる。で夜が明けるのを待ってその大尽の家では、す
ぐ西の家へやってきて、こういう氏神の言い伝えだから、おま
えの家へうちの娘をもらつてもらいたいというわけです。西の
家のお母さんが非常に驚いて、あほもない、こんな貧乏な家へ
東の家の娘なんかもらせるものではないというけれども、東の
家ではぜひにもらつてくれ、なんぼないでも、もらつてくれん
と黒土にされて困るから、おまえの家もつくてちゃんとする
からというわけで、そういういますと大尽の家から大工がやつて
きてどんどん西の家をこしらえて、立派なご祝言をします。そ
こでこのクツチャネがお母さんに「どうだおつかあ、おれはう
まいかんべんをしつらあ」といいました。それで終りです。(笑
い)

考えたら三年寝太郎のやつが、最後に大だましにだましてじ
ょうずに結婚をするのですね。だから勸善懲惡の考え方をした
らこんなサボリの嘘つきが、こんなよい娘さんをもらうはずが
ないじゃないかといったって、もらっているんだからしょうが

ないです。もらいましたと書いてあるんだから。だからそうい
うふうに考えますと、そんな怠け者が得をするだろかと思うけ
れどちゃんとあるわけです。

その三・水木の言葉

あるいは「水木の言葉」という話があります。このはじめを
読んでみますと、昔あるところに無精な若者があつた。毎日ぶ
らぶらしていた。ある日柿が食べたくなつたが、木に登つてと
るのもいやだし、柿の木の下にいたら落ちてくるかもしれない
と思つて、むしろをしいて仰向いて口をあけていた。(笑い)こ
れも非常に共感を呼びますね。(笑い) こういう無精者が主人公
なのです。すると西の方から鳥が一羽飛んできてとまった。ま
もなく東の方からも鳥がとんできた。そして庭の鳥が世間話を
始めた。おれのいる町の長者殿は大病だ。庭に植えてある大き
な水木が血を吸っているためだが、誰も知らない。情ないこと
だ。あれさえ切り倒せば長者殿の病気はすぐ治るのだという世
間話を、この怠けものが聞いて、そして長者殿のところに行き、
うまくいって、大成功する話です。この大成功する話の主人公
は大いに無精者で柿の木の下に口をあけて寝ていたわけですね。
こいつが大成功するのです。そうするとこのように、怠け者が

成功している話もでてくるということは、さっきから言っていますよ。簡単な考え方では理解することができないことがわかります。

その四・ものぐさの糸繰り女

ところで、このような怠け者の話というのは、グリム童話にも大分あります。たとえばこれも傑作な話ですが、これは女の怠け者です。(笑い)『ものぐさの糸繰り女』。これは『眠りの森の美女』についての講義のときにも話をすると思いますが、糸を繰るということは童話のお得意のテーマです。この糸を繰るということは何だと思えますか。これほどよく出てくるこれは、運命の糸を繰るという意味で、運命の女神というのはよく糸を繰っています。だから、糸繰りというのは女性の非常に大事な仕事です。そういう象徴の意味もありますけれども、一般の女性の仕事として、糸繰りをするということは実際的にも絶対に大事だったわけです。女の人が糸繰りをしてくれないことには、皆着るものがないわけですから。昔は、夜なべというのがあって、日本人だったら夜にわらじを作ったり、ぞうりをつくる。足袋のやぶれたのをつづるのとか、そういうのが女性の仕事としてあったのです。そして、糸繰りということも非常に

大事な女の仕事なのです。

日本の話でしたら『天邪鬼』の話なんかありますね。あの中で、糸繰っているところがあるでしょう。日本の話でも糸を繰っている娘とか、はたを織っている娘がよくでてきます。あるいは鶴女房でもはたを織ってますね。このように女性として絶対やらなければならない、糸繰りがきらいなものぐさな女がいたということです。それがグリム童話一二八番『ものぐさの糸繰り娘』(die faule Spinnerin)という話です。

亭主と女房がいて、女房の方はとてもものぐさで、いつも何もしないでいたいものだと思っていた。亭主がつむぐんだぞと行って渡したものをすっかりつむいだことなんかなくて、つむいだものでも巻きとらずにみんな糸巻きざおに巻きっぱなしにしておいた。で、こういうふうにしてサボってばかりいるのです。亭主が小言を言いますと、口だけは達者で、いったいどうして私に巻きとってくれというんだと言う。わくがないんだから、さっさと森へ行ってひとっこさえてくれというわけです。それほどいりやうなものならといって、亭主がわくにする木をとるために森に行こうとします。ところで、亭主が森へ行っちゃんとわくを作ってくると、この女の人は働かなければいけないわけですね。だから亭主にそういったものの亭主がわくを

取りにいくと心配になってきます。

ところがこの女はうまいこと考えついたので、こっそり亭主の後へついて森へ出かけていった。そしてその亭主が木に登って材木を選んで切ろうとすると、女房は下の方のみつからないようなやぶの中にもぐりこんで、大きな声で上の方に向かって呼んだ。「わくの木を切るやつは死んじまう。わく取りするやつあくたばるぞ」(笑い)亭主は聞き耳をたててびっくりした。

何だと思うんですね。ところがまた繰り返しなのです。三べん繰り返します。なんべんもこう「……」というんで亭主はびっくりして急いで木から降りて帰ろうとした。その間に(ここがおもしろいですよ)女房は必死になって走って帰ります。(笑い)これは非常に大切なことですが大体怠け者というのはずごく仕事をするときがあります。(笑い)そして、亭主より先に帰って何くわぬ顔をして家にいるわけです。そこで、亭主に「おい、わくを持ち帰ったか」ときくとだめだったという。わくをもつて帰らなければどうも困ると女房はいうんですね。

ところがまもなく、亭主は家の中のだらしのないのがどうにもこうにもやりきれなくなってきた、文句をいうのです。「つむいだより糸が巻き竿に巻きっぱなしになっているのは、やっぱりみつともないなあ」どうだろうね。お前さん」と女房は言っ

た。「どうせわくが手に入らないんならお前さんが屋根裏に上がつて、私が下にいて糸巻きぎおを放り上げるから、お前さんがそれをまた投げ降ろすのだ。そうすりゃ雑作なく糸ができてしまふぞ」うん、そいつはいい」と調子よく言った。そんなわけで仕事が片付くと亭主が言った。「より糸の方はこれで片付いた。今度はより糸を煮なきやいけない」女房はまた一苦勞で、さっそく朝早く糸を煮ることにしようと言ったものの、また新しいいたずらを思いついた。朝早く起きて火をおこしてかまをかけた。ところがより糸のかわりに麻くずの固まりを入れていつまでも煮っぱなしにしておいた。それからまた、寢床に入っている亭主のところに行って亭主に向かって言った。「私はちょっと出かけなくっちゃならないから、その間に起きてかまに入れて火にかかっているより糸を見てくださいよ。だけどちゃんとき分について気をつけてくれないと困りますよ。ええ、鶏が鳴くと、麻くずの固まりしかみえないもんだからたまげてしまった。で、気の毒な亭主は息を殺してもとも言わず、自分がぐずぐずしてたからだ、自分のせいだと思ってそれからというもののはよ

り糸やつむぐことは一言も言わなくなった。(笑い)

これがドイツのお話ですから感激しますけれど、ところがね、それからがおもしろいのです。終りに一言ついているんです。

「……だけどね、こいつは性悪女だったのさ」まさに感激すべき女性ですね。サボリをやり遂げるために大活躍するわけですから。(笑い)ところが、こいつは性悪女だと書いてあるのですね。作者がそういつている。お話のあとに一言ついているわけです。「性悪女だった」だから言ってみれば、これが特別性悪な女で、こんな性悪に皆さんなつては困りますよとか、こんなことはめつたにないので、これは特別性悪だから成功したんですよというような意味が含まれています。これはおそらくもとの話にはついてなかったと思います。だからおそらくグリムがつけたか、あるいは世の中には必ずこういう人がいるもので(笑い)自分とはともかく他人はサボってはいかんと思っている人(笑い)がたぶんつけたと思います。

おとぎ話のワケ

ところがこういふのがつかずに、いっばなしの話と、ついている話とがある。こういうところがおとぎ話のおもしろいところで、おとぎ話にものがついたり減ったりするのです。ついで

に言っておきますと、おとぎ話の終りにこのようなのがつくのがちよいちよいあります。簡単に言いますと、「だったのさ」というのもこれも付け足りですね。たとえば、そこで一寸法師は、めでたく結婚しましたと、さという。「結婚しました」ではなくて、「とさ」ではちよつと違うんです。どう違うかというところ、そういうお話がありましたとき……。しかし……ということですね。しかし、今の世の中はということにちよつとながるわけでしょう。それから中にはこんな例もあります。たとえば「こういうふうに王子さまとお姫さまは非常に幸福に暮らしました。しかしこの世にはそんな幸福なこととはあまりないと思いませんか」そんなのがついているのです。あるいは中には語呂合わせのみたいのが最後についています。「なんや話はべった」とか「もすこし米ん団子、早う食わにやすえる」などというのが終りについていきます。これはなぜこんなのがつくのかわかりますか。

これはどういふことかというところ、これはおとぎ話の國、おとぎ話の世界と、みんなが住んでいる世界は違うんだから、おとぎ話ですんだ後みんなが自分らの世界に帰りやすいためにひつけてあるのです。そういう配慮があるのとないのとあります。が、映画でもそういうのがあるのに気付きませんか。そういう

ことをつくづく思ったのは、どうも古い話ばかりするので年がわかりませうけれど、ぼくが感激してみた映画に、たとえば「汚れなき悪戯」というのがあります。マルセリーノというものすごくかわいいう坊やがいたずらをして天使になって昇天するお話です。そして最後にお前はよい事をしたので何か願いをききとどけてやろうと、神さまが言う、「お母さんのところへいきなさい」とその子がいます。これはどういふことかと言ったら「お母さんは亡くなっていましたから」結局死ぬことです。そしてその子は死んでいきます。

これがすべからお話だといふことの一つは、死といふことが少年の一番大切な望みがかなえられる形としておとずれるということです。ぼくらは死にたいと思っていませぬ、お願いするといふたら、長生きさせてもらいたいとか、なるべく死にたくないといふふうにいるぐらいなのに、あのほんとにきれいな坊やが一番の願ひ事としては、お母さんのところに行きたいといひます。もしたらお母さんのところに行かしてあげようといふ形で、実際はそれはお母さんのところへ行くといひ方でもできるし、違ふ言ひ方をする、あの坊やは小さくして死んでいったといひ方ができるわけです。つまり我々俗世界の人間がいうと天折といふことになるし、それを天使の世界で言

うと、あの坊やは偉かったので非常に早く母親のところへ行けたといひ方ができるのです。そういう事を描いた映画として、最後の坊やが死んでいくところというのはものすごく感動的で、ぼくらは涙がいっぱい出て感動するのですけれど、そこで映画は終わらないのですね。

映画では、そういう話が実はこの寺院には伝わっておるのですよといふふうになって、それからその話を聞いた人がぞろぞろ帰っていくところが、写るのです。そして終わっていくのです。考えたなら、そんなアホなと思うでしょ。そんなのいらぬじゃないか、坊やが死にますといふところで、昇天していつて、キリストが見えて、皆がわあーと泣いた所で、ぱつと終わつた方が、はるかに終りとしては感動的ですね。そんな話がありましたときと云つて、その話を聞いた人が帰っていくところなど必要ないと思ひませんか。そこで、僕が考えたのは、なるほど映画といふのはうまくできている。このあいだにみんな涙をふくようにできている。(笑ひ) ここで終わつたら、カッコ悪くて、しょうがないですからね。(笑ひ) 一緒にいつていた人に、涙を見せんようにして、皆この間になくわんような顔をして、涙をふいておもしろかつたといふのです。(笑ひ)

このような言ひ方もできますけれど、結局どういふことかと

いうと、さっき、僕が言いましたように一人の死ということ、死に去って行く死というのではなく、あのように選ばれた、あの少年はだれよりも早く母親のもとに、あるいは、神のもとに召されていったのだというのは、すごいすばらしい考え方です。けれども、あんまりその考えにぼくらがいかれたら、どうなりますか。ぼくも今日限り、お母さんの所へ行かなければならない。それはこわい。そうじゃなくて、やっぱり人間である限り出来るだけ長く生きたいし、ぼくら、亡きお母さんの所へ行きたいと言ったって、一方ではなるべく行かんで生きていたいというの、われわれのリアリティーです。外的な現実（outer reality）とごっこいいでしょう。それに対して内的現実（inner reality）という方からみると、さっき言いましたように、死というものはそれだけ、すばらしいものに見えるんだけど、そういうすばらしい考え方だけで、われわれは生きて行けません。こういうすばらしいお話を聞いて、その後で、われわれは俗世界の中へ帰って行くのです。ということをはっきりとさせたいわけです。そう考えると、作者の意図がわかります。

小説でもお話でも、ワクのあるのがあるでしょ。そのワクのあるのをワク物語といいます。このワクというのがついていないものもあります。この場合でも、『物ぐさの糸繰り女』とい

うのは、あんまりえげつなくだましすぎるので、どうしてもワクをつけたくありません。しかし話としては、この場合ついていない方が、僕は好きですけれど。どうですか。しかし子どもに話をしていたら、つけたくなるでしょうね。子どもが喜んで、ワー、私もそうならうかしらなんて言われたら……。だからこの辺は、なかなか微妙なところです。最後の部分をだれが付けたのかわかりませんが、ともかく『物ぐさの糸繰り女』というこんなおもしろい怠けもの話が、ちゃんとグリムにあるのです。

怠け者の話 その五・二人の無精もの

ところで、このような怠けもののお話を、楽しんでいるようなものがあります。日本の童話でいいますと、『二人の無精もの』というのがありまして、これは非常に簡単です。読んでみますと、昔々ある所にずくなしの男があった。おかみさんににぎり飯をこしらえさせ、それをくびにくくりつけてもらって、ふところ手をして、町に用たしに出かけた。お昼ごろになって、おなががへってきたけれども、ずくが無いもので（おもしろい言い方ですね、無精ものだからですね）ずくが無いもんで、にぎり飯を首から取ることがいやで、誰か来たらとってもらおう

と思つた。この辺よくわかりますね。そのまま向こうの方へ行くと、大きな口をあけた男がやつてきた。アッ、誰かくる。あんなに口をあけているところをみると、よっぽど腹がすいているにちがいない。あの人にたのんで、にぎり飯をとってもらいましょうと思つて、「もしもし、私は首におにぎりをゆわえつけているが、手をだしてほどくずくがない。おまえさんがとつてくれたら、半分だけ分けてあげる」とたのんだ。すると口をあいた男がどう言うたかという、「私はさつきから笠のひもがとけてこまつているが、そのひもを結ぶずくがないので、誰かに結んでもらわんと思つて、口をあいて笠をブラブラとさせている」と。(笑い) こんな話もあります。

これではまるつきり、怠けもののお話を楽しんでいる感じですね。ただし、この二人の男は無精者でしたなどと終りに何にも書いていない。こういう話を聞いたら、誰だつて笑いますけれども、いったい何のためにあるかという、こういうふうな簡単な話というのは、それこそ、フロイトが言いますような考え方、願望充足という考え方で、簡単に説明できると思つてつまり、日本でもドイツでも、(ドイツという国は、いろいろな意味で日本とにている所が多いです) 勤勉をとうとぶ国です。実際はもう日本の女性たちは、はるかに勤勉でなくなりま

した。しかし、その女性の勤勉さというのは、ドイツ圏にはまだ残っています。われわれはスイスに行くと、ほんとに感激しますね。まだこういう女性がおつたのかしら、と思つます。大抵、汽車や電車に乗ると、毛糸なんかをあんでいる女の人が、ものすごく多いです。大体その毛糸をギャーギャーと、あんな機械で (笑い) ああいう無粋なことを考える女性は先ずいませんね。みんな手編です。いろいろな編み方があつて。お互いにお母さんから伝わったり、おばあさんから教えられたり、近所の人に習つたりして、たくさん編んでいます。さつき言いましたように、女の人と、スピネンII つむぐということは、切つても切れない伝統としてまだまだ残っています。日本ほどこれだけ単純に伝統というものをかなぐり捨ててる国はないようです。そういう意味では、皆さんもスイスに行つて見て来てほしいです。そういう勤勉に仕事をやりぬくということが、今でも残っています。その点フランス語圏の方は、やっぱり違います。フランス語圏の方へ入ると、楽しむことが、非常に大事なことです。だから何とも言えん陽気さとか、楽しさとかがありますけれど、ドイツ語圏の方に行きますと、みな仕事をしなければならぬ、勤勉にやらなければならないという感じが強いです。

その六・三人の糸繰り女

さて、おとぎ話というものは冬のものです。冬暗くなってもう外で仕事ができないので、中へ入って、日本であればわらじを作るとか何かしていると、口の方も動いて、うまい人が話を始めますね。するとさっきの「ずくなし」の話なんかきいて皆ワッと笑う。これはつまり、皆一生懸命働きながらも、心の片すみではそれだけサボったらどれだけ楽しいでしょうという気持ちをもっている。世の中にそんな男がいるのかな、そこまです徹底すると楽しいだろうな。そういうふうな意味あいをもって、さっきの怠け者の糸つむぎ女とか、この二人の怠け者の話などが生じてきたと思います。

このような類のものとして、グリムからもう一例あげます。『三人の糸繰り女』というお話です。怠け者で糸つむぎがきらいで何もしない女の子がいた。あんまり怠け者で糸つむぎがきらいお母さんが一発くらわすとギャーッと泣き出した。あんまりギャーギャー泣いているので、そこへ通りかかったお妃が、なぜ泣いているんですかとたずねた。お母さんがごまかさなきやいかなと思つて、いやこの子は糸つむぎが好きで好きであんまり糸つむぎばかりするので、たまにやめとけとおこつたら泣いて

いるんですというて、逆をいうわけです。(笑い) したらお妃が感激して、そんな働き手の女の人がうちでも欲しいと思つていたから、すぐお城へ来て糸つむぎをするようにと、お城へ連れていかれるのです。

そこで、あんたの好きなだけしなさいといつてへや中につむぐ糸を置かれ、やらされることになって、糸つむぎがいやで泣いていた。したら三人の女の人がやって来た。その三人の女は糸つむぎが好きで、糸をつむぐために足でふむので足がものすごく大きい女と、糸をなめるから口びるが無茶苦茶に大きい女と、それからもう一人、糸をまわすために、幅広い指をもつた女とであった。その女たちが糸つむぎは好きだから代りに糸をつむいでやるけれども、全部つむいでやったら、あんたはお妃にほめられて、おそらく、王子さまと結婚せよということになるけれども、その結婚式にわれわれ三人を必ず、招待することを約束してほしいというのです。そこで約束すると、三人が見てるまに、バーツと仕事をしてのけます。そしてやってしまつて帰つたあと、お妃が出てきてものすごく感心して、こんなたくさん糸をつむぐ女だったら、王子の嫁にもraitたい。そして結婚式になるのです。結婚式になったら、すごく変てこな女の人が三人やつてくるのです。ここが話の一つの頂点です

が、さきほどの怠けものの娘が、平気で三人を呼び入れます。これは私の三人のおばさんで、前から結婚式には、招待する約束だったので、絶対に来てもらわなければいけません。

するとお妃がなんとという変な女たちが来たのだ、あんたはいいたいどうしてそんなに、足が大きいのかとたずねます。「これは踏むからさ」あんたは何でそんなに口びるが大きいんですかと聞くと、それは糸をつむぐ時に「なめるからさ」とこういうわけです。そして、幅広の拇指の女は「糸をまわすからさ」といいます。そしてらお妃がびっくりして、やっぱり糸をつむぐということは大変なことだ。もしもうちの王子の嫁がそうなたら大変だから、あんたは今日限りつむぐことをやめなさい。(笑い) つむぎたいんでしょうけれど、これからはやめなさいということになって、めでたく結婚しました。(笑い) これも怠けものがすぐく得をする話です。

この話にも、願望充足の意味が入っていると思います。糸をつむがずにいる方が、女というものは、いいんじゃないかしら、そして、うまいことやって、ひよっとしたらお妃になって、何もつむぎもせずに生きている幸福な女って、やっぱりありうるのじゃないかしら。そんな意味で、願望充足という見方ができますね。もっとも、この話は他の意味も読みとることができ

すが。

その七・ものぐさハインツ

すべての怠けものの話が願望充足ということのみで解釈されるのではなく、それ以上ものを感じさせられることがあります。そのような例としてグリム童話一六四番の『ものぐさハインツ』をとりあげてみます。このハインツというのは、ものぐさいものぐさで何も仕事をしないんです。奥さんの方もまた輪をかけてものぐさで、二人ともものぐさでいろいろやっているわけです。奥さんと一緒に朝寝したり昼寝したりしているのです。そして一番大事な最後の所で、うでをふり上げた時に、ハチみつの人っていたつぼが、ガチャンと落ちてくるわけです。上等のハチみつが床にこぼれる。その時ハインツが言ったことには、こんなことになったけれども、つぼがおれの頭の上に落ちなかったということは、何と幸せではないかと。(笑い) そして何ごとも運とあきらめなければいけないもんだ、と言って、かけらの中にちよっぴりハチみつが残っているのを見て、手を伸ばしてホクホクして、この残りカスを「お前と二人でごちそうになろうよ」と二人喜んで、せいては事をしそんじると言っています。ゆっくりそれを食って、楽しみました、というお話です。

この話で大事なことは、サボって、サボってしているうちに、つばをひっかけて、バーンと落ちてきて、ガチャンと割れるけれど、少しもおこらないということですね。そしてどういふことを言ったかというと、つばが頭の上に落ちなくて、実に幸せである。しかもまた、カケラの中にハチみつが残ったことは、何と幸せだろうと言って、西洋にはめずらしい非常に東洋的な考え、つまり運命を享受するという考えをしているのです。われわれ東洋人は西洋人に比べて、はるかにそういう考え方がうまいですね。お父さんが死のうと、お母さんが死のうと、まあこれが運命だから、もう仕方がない。もうあきらめるこっちゃと。そして、われわれ東洋人はスイスイあきらめてしまう。ところが、西洋人の場合、なかなかあきらめない。何とかしてこれを克服しようという現われが、西洋の場合は、自然科学の発展に結びついてくるのです。何とか台風をさけるためにどうしたらよいか。洪水をさけるためにはどうしたらよいか。そしてまたダムを作ることとか、発電をすることか考えますね。日本はどうですか。台風がくると、できる事といったら、なるべくかくれていることですね。雨戸を締めて、(笑い)そして台風が終わったら、終わったなと外へ出てくる。そしてまあ、外はやられたけれど、稲はやられたけれど、家がつぶれなくてよかったな

あ言うて、あきらめます。絶対に科学なんかできないわけです。このように考えますと、単なる願望充足ではなく、なまけものとしての「運命の享受」という一つの生き方、これだけがいい考え方ではありませんけれども、一つの大きいテーマが浮かんできます。そして実際われわれは、人生を生きていく上において、運命と、戦わなければならない時と、享受しなくてはいけない時と、二つあると思います。みなさんは若いから運命と戦う方と思います。みなさんのなかにもう運命を享受している人がいたら、二十歳ではないです。しかし私みたいに年をとってくると、もう運命を享受することを思いますね。ハインツの話を聞くと、非常に感激します。このように、人生というのは、みんな二つの面があるので。

運命に対抗しなかつたら、人間おもしろくありませんし、運命を享受することができなかつたら、また、人生はおもしろくありません。そしてさっきも言いましたように、おとぎ話というのはどちらかひとつの線を非常にきれいに取り扱っているわけです。だからおとぎ話で相反するものを必ず見つけることができます。Von Franzがこのことを書いています。「おとぎ話の中から一つの方策をひき出すことは絶対にできない」とえは、おとぎ話の中によくありますけれど、どこか行く時に一番

はじめに行った者が絶対得する場合と、一番後に行った者が得する場合があるでしょう。初めにおれがやってやろうと行って大失敗して、二番目失敗して、三番目に一番最後の人が成功する話。また、その逆のこともある。「虎穴に入らずんば虎兇を得ず」ということわざに対して、「君子危きに近寄らず」ということわざがあるのです。人生って皆両面をもっているのです。

そして、その時その場でその人にとってどちらかが、ある一つが真理なのです。それをどうして見分けるかということとは非常にむずかしいことですけれども、一般論として言うことはできません。だから人生で我々が運命と対抗して輝かしくがん張ることも意味がありますし、運命をそのまま享受する素晴らしさもあります。そこで、西洋のドイツのお話としてこのようなハインツの話があるのは非常に面白く思います。

その八・三人の無精者

ところが、そういう運命の享受などということをもっと越えて、さっき言いました『水木の言葉』では、無精者で柿の木に登るのがいやだから、口をあけて待っていたら、鳥が飛んでき、長者は水木によってやられていと話しているのが聞こえてくる。後で長者のところへ行き、長者が困っているときに、

水木を切りなさいといって、それで木を切って後長者が助かってめでたし、めでたしとなる。そういう時に、他にもよくそんな話がありますけれど、怠け者の特徴として、そういうよい話を聞くことがよくあります。いわば天啓を受けやすいのです。

たとえばグリム童話一五一番の『三人の無精者』というのがあります。短いから読んでみましょうか。

ある王さまに息子が三人あって、三人とも同じようにかわいくなって自分が死んだ後、誰を王さまにしたらよいか見当がつかなかった。いよいよ死ぬという時になると、寢床の前へ呼んでこう言った。「いいかい、わしが一人で考えたことがあるのだが、それをお前たちに話してきかせよう。というのはお前たちの中で一番無精者がわしの後について王さまになるといことだ」一番上のが言った。「この国は私のものです。なにしろ私は無精で、横になって寝ようというとき、目に水の玉が落ちてきたって、寝るのに目をつぶろうとはしないんですからね」とこう言うと、二番目の男が、「父上、国は私のものです。なにしろ私は無精者で火のそばにすわってあたるのに足をひっこめるくらいなら、かかとに火傷した方がましというぐらいです。な」と。三番目が言った。「父上、この国は私のものです。なにしろ私は無精者で首をしめられる時になってなわを首に巻き

つけられ、そのなわを切ってもいいよと言って、よく切れる小刀を持たされても、なわのところまで手をあげるぐらいなら、死んだ方がましですからね」と言った。父親がそう言うのを聞いて言った。「お前が一番ひどい。お前が王さまになればいい」と。

これもおもしろいですね、初めに、物語の構成メンバーを考えますと、王さまと子ども三人です。これ、どこが特徴ですか。この話に女性が出てきません。つまり、これは、この国、あるいはこの心、この話の中には女性性というのが欠けているわけです。だからこの話の中で女性性を獲得しうる可能性の一番強いのが王さまになりうるわけですね。そして、王さまが病気であるというのはどういうことですか。それは、治めている一番中心の王さまが死ぬよりしかたがない。これをわれわれ個人に適用して考えると、私という人間も一つの王国と考えます。河合隼雄王国と考えますと、私という王国で王さまが病気になるというこのことは、私の最も根本的な人生観がもう朽ち果てようということを意味します。そういう時って皆さんにもありませんでしたか。そんな時、人はどうなりますか、depression（抑うつ症）になりますね。ものすごく気分が沈みます。たとえば、私が今いうてますように、勤勉に働くことこそ絶対に大

切だと思って、勤勉ということを旗印にしてきた場合には、私の王さまの名前はたとえば勤勉王という王さまになりますね。（笑い）そしてぼくは王さまの言う通り心の中で頑張ってるわけで、勤勉王のいいつけ通りせいぜい働きます。ところがふとある日、私の前に美人が出現してきて、この女の子をもう絶対にお嫁さんにほしいと思うようになる。そこでこの女の子が私の家に遊びに来ないかというから、これはしめしめと思って遊びにいったら家が汚なくてむちゃくちゃ。それでまあとにかくそこらにすわりなさいというのですわったら、ゴミだらけで、でてくる茶わんは洗ってないし（笑い）それでも、その家の人は平気である。どうしてこんな無精な女好きになったんだと思う。私の勤勉王の考えによれば一番駄目な女じゃないか、この王国でいうと最低の女だと思うんですけれど、どっからともなく信号がでてきてあの女はすばらしい、なぜか知らんけれど、あの人がいてくれなければ私は死ぬと思うこと実際あるでしょう。ありませんか。そういう経験をしたことがない人は非常に残念でした。そのうちすると思います。（笑い）

人間というものは、誰しも、その指導原理（*guling principle*）というものをみんなもっています。それがくずされかかるわけです。つまり、先の例でいうと、勤勉王が死にかかる。つまり、

怠けものの女性の生き方を少しは肯定しなければならぬ。これを思うとゆううつだし、会いにいかんと楽しくないし。会うているうちは楽しいけど、後で考え出すといやになってくる。というふうなそのときが王が病気になった状態なのです。ここで王さまが死んで、新しい王がたつわけですね。そしてそれがうまくいったら大成功なのです。

みんな青年期によく気分が沈むときがあるということは、青年期には自分の *ruling principle* というのがものすごく変わりま
すから、当り前ですね。それまではお父さんかお母さんからもらっています。ところがお父さんやお母さんはそういうけれども、「私だって」というのがでてくるわけです。そうするとその王さまを殺して、時には病気ではなくびんびんと生きていても殺して新しいのといれかえるわけです。だから王さまの病気というのは、おとき話のお得意の話ですけど、いうてみれば、ひとつの体制の *ruling principle* が入れかわるということです。われわれ人間世界が成長してくる。あるいは私という人間が成長するということは、*ruling principle* も常に新しく更新されなければなりません。つまり、ある程度まで成長したら改変されなければなりません。これは非常に苦しいことです。王さまは死なずにずっといてほしいし、その反面、やっぱり変わって

もらわなければこまるし、というところで、いろいろジレンマができてくる。そして、王さまの一番勇ましいときにこそ、王さまを殺すべきだという考え方さえ生じてきます。(王の死については、フレイザー『金枝篇』参照) それは、その王さまが病気のときに継承したら、病んでる魂を継承しなければならない。だから王さまが一番すばらしい時に、殺して次の人がその魂を継承するといふという考え方です。これは未開人の国によくあります。王さまが一番すばらしい時に王さまを殺して王位継承をします。

しかし、それほどのことは、われわれ現代人はやらないなどと思っ
ていますけれど、われわれの心の中では実際行なわれているわけです。特に青年期というのは、王さまを殺さなければならぬ時期なのです。多くの場合それは恋愛とともにやります。非常に不思議ですね。恋愛というほどのばかげたことでもやらん限り、王さまを殺せんですね。(笑い)

ところで、話をもとにかえしますと、この王さまが亡くなつていくとき
には、うちの国は一番の無精をもって王とすると
いうのですね。そこで、首をしめて殺されるというときでも、小刀を持っていてもここへあげるのがあるさい。小刀を持ちあげ
るぐらいだったら死んだ方がましだという無精ものが王

位を継ぐことになります。

無為にして化す

ここで私は中国における最も理想的な王さまの像を思い起します。中国における王の理想像、それは「無為にして化す」というのです。王さまがいろいろと努力したりするのはなく、何もしていないのに、国中が良い方向に変化してゆく。これは明らかに老荘の考えです。こういう老荘的考え方がヨーロッパの精神文化の主流にはないのに、ヨーロッパのおとぎ話の中に入っているのです。おもしろいでしょ。つまりこれは、おとぎ話というのはその社会の表通りの考え方のみならず、裏通りの考え方をたくさんもっているのです。だから今回後で言う話にも、日本の表通りの考え方とまるっきり異なる裏の考え方が含まれています。つまりさつきから言っていますように、人間の考え方には両方あるのです。必ず二面性がある中のどちらかの一面が非常に強調されて、その社会の *ruling principle* になっています。その場合に忘れられている半面というものは、案外おとぎ話の中に入っているのです。だからこの「無為にして化す」という考え方は、ヨーロッパの表通りにはあまりないと思います。ですが、最も無為なやつが王さまとして最適であるというテ

ーマは、ちゃんとおとぎ話の中に入っているわけです。

ここで少し話が横にいきますけれども、無為にして化すという点から言いますと我々心理療法をやっている人間というのはほとんどこれです。カウンセラーというのは、ものすごいカウンセラーほど何にもしなくなるのです。ほんとに。カウンセラーというのは、何にもしないということに全力を傾注できる人間であると思ふのです。何もしないことに全力を傾注するということはなかなかむずかしいことです。なかなかできません。

話がもう一つ横にいきますけども、こんな話があります。確かスタニスラフスキーという人の書いた『俳優修業』という本にあったと思います。スタニスラフスキーという人は近代的な演出法を考えた非常にすばらしい人ですけれど、その人が、俳優になっていく人たちのために書いたおもしろい本です。その中にいろいろ練習のことが書いてある。皆さんは心理劇をやっておられる人が多いので存知だと思いますが、たとえば私がこの人に、前へ出て、恋人を待っているところをやってくださいという、そんなら皆すぐできますね。すわって時計をみてそわそわしてとか。次に、食事をつくってせっかく待っているのに夫が帰ってこない奥さんを演じてみてください。またそれ

もできます。

そこで次には、「イスにすわっているだけで何にもしていない」というところをやってくれといわれるわけです。そうなる、「何にもせずにすわっている」ということがなかなかできないのですね。すわっていても、何かさわってみたり、何かさわそわと落ち着かなかつたりする。舞台の上のイスにすわって何にもせずにいるということはものすごくむずかしいことです。誰もうまくできなかったので、先生が、はい私がやってみますときあつと舞台の上へのぼって行ってパツとすわったら、何にもせずにちゃんとすわって、皆は、はあ何にもしていないなあと、見ていられるわけです。安心して見ていられるわけですが、へたな者が何もせずにいるとそわそわして、見る方も何かやらないかという気がしてくる。ところが何もしないということも舞台の上で、しかも皆にあの人は何もせずにいるとはつきりわからせるようにできたら、これはもうすごい名優だと書いてあります。

クライエントというのは、悩みがあつて来るわけです。クライエントがやってきて、苦しいですとか、死にそうですとかいふことを話するのを、何も助けずに何もせずに、ひたすら話を聞いていることができたなら、セラピストとして、大したものだ

と思います。初めのうちは何かしてあげたくてたまらない。そして何かしたくなって、何かしてしまつて大体失敗します。心理療法をしていて失敗したという時、大方は何かをせずに失敗するというより、何かをして失敗する方がよほど多いのです。このように考えてくると、先ほどの『水木の言葉』のお話では、何もしないということによつて変化がおこる。何もしない怠けものにこそ鳥の声が聞こえることが大切だと思われまふ。つまり鳥が非常にいいことを言っているんだけど、誰も聞いてないわけですね。鳥の世間話を聞いた人というのはこの怠けものだけなのです。

怠け者の話・その九・貧乏神

もう一つ無精者の話をします。無精者の話はたくさんあるのですけれど、これは日本のお話で『貧乏神』という話です。ちよつと読んでみましょう。あるところに若い夫婦者が住んでいました。嫁がしようたれ（無精者のことです）でお茶を飲んだら茶がらを、ご飯を食べたら食べ残しをくどの前へ捨てていました。くどつてわかりますね。おくどさん、あるいはへつっいさんとか、知りませんか。かまどのことですが、そのくどの前へ捨てていましたので、しまいには貧乏神がつけ込んでその家

に入りこんできました。そのためにしだいに貧乏になって、しまいはどうにもこうにもしようがないようになってきました。正月が近づいても餅もつけぬ、はてどうしたものだろうかと思つているうちに年の晩が来ました。大晦日ですね。この場合にはその無精者の嫁さんのために非常に悪くなっていくのです。ところがそれが逆転するのです。

おやじはマキがないので座板でも燃やそうと床板をはずして、くどへくべてあたつていた。ほいだら（そしたらということ、関西弁で書いてあるけれど）奥の方で何か音をたてる者がありました。何かと思つてみると、ボロを着たしゃぐまの（汚ないという意味ですが）老人が出て来ました。親父が座板でなぐろうとすると、俺にも火にあたらせろといつて火にあたつた。ほいでどう言ふかと思つてみると、おれはこの家へ来て八年になるが今では何もなくなつてしまつた。おまえの家内はくどの前に茶がらやご飯のカスを投げるから大好きだ。それでおれはこの家に来ているのだ。お前がもしぶげん者になりたかつたら家内に暇を出せといつた。それで男も家内に暇を出す氣になつてそうしてしまいました。

こういうところがおとぎ話の特徴です。つまり、非常に簡単に話が運びますね。この奥さんを離縁しようかするまいか、い

かに悩んだかなどそんなことは書いてない。離婚となればあっさり離婚してしまふ。ほいで貧乏神が言いました。町へ行つて酒を一升買つてこい。男が徳利がないといえは唐津屋へ行つて買つてこいと言いました。男は言われた通りに唐津屋へ行って酒屋へ行つて一升いれてもつてきました。このお金はみんなしゃぐま老人が出してくれました。この汚ない老人が出したのです。今度は酒を持つて帰つて二人で飲んでいました。

今晚は年の晩じゃけに下へ下へと saying 殿さまがお通りになる。殿さまがかがにのつて向うから来るけにその時かごの中をめぐけてなぐりこめと言うので、男はそんな恐しいことできるものじゃない、と言ふと貧乏神はそのほかにはお前の家が金持になる方法はない。どうしてもなぐり込めと言いました。男は貧乏神のいうことにさからうわけにもいかぬと思つて天びん棒を持つて待ち構えていました。するとやはり貧乏神の言う通りたくさんのちようちんをつけておかがやつてきました。天びん棒でかごの中をなぐろうとしたが、誤つて先ぶりをなぐりました。するとぼこつと死んでしまいました。そしてかごはまっすぐに通り過ぎてしまいました。死んだ先ぶれの男を見るとそれが銅貨になっていました。男があきれて見ていると貧乏神がやつてきました。どうして殿さまをなぐらなかつたのかとたず

ねました。それから、年が明けたらもう一度かごが来るのに、それもなぐればよいと教えました。男は天びん棒で殿さまのかごをめぐって打ったところが、大きな音がして何かくずれました。かごの中からは一分金や小判がぎくぎく出てきました。そのお金を拾い集めて、男はまた昔のようにぶげん者になったそうです。

結局この男、すごい金持になるんですね。そのことを教えてくれたのが貧乏神なのですが、その貧乏神がどうして来たかというところ、奥さんが怠け者だったためにやって来たのです。そうすると、やっぱり怠け者の女性を妻としていたために、結局は得をしたことになるわけです。この話は後でもっとくわしく解説してみたいと思いますけれど、ここで殿さまをなぐるなんてのがでてくるでしょう。つまり殿さまという絶対なぐってはいけないものをボーンとなぐってこそ金が手に入ります。これはおそらく徳川時代にできた話ではないかと思いますが、そのころの *ruling principle* の逆でしょう。つまり殿さまという者は下に下にときたら顔をあげてもいけないのに、それを打ちなぐるぐらいの者こそ金を獲得できるんだというテーマがちゃん入っているわけです。だから民衆の力というものは強いと思います。表面にどんな考えがあるにしても、必ず裏の方をおと

ぎ話としてみんな持つてるわけです。

この話でも、怠けものにつけこんでやってきた貧乏神が、一番大事なものです。殿さまのかごをなぐることによって金持になるといって天啓を与えてくれる。そう考えますと怠け者の非常にいいところというのは、天啓に対して耳が開かれているということです。その逆を言いますと、勤勉に働いている人というのは、天啓に耳の開いていない人です。レポートを書かねばならない、試験があるので勉強しなくてはならない、アルバイトもと走りまわっていたら、ちょっとはお金が入ってくるし、ちょっとは成績もよくなる。そして、レポート出せとか試験を受けろとか働けとかいう、お父さん、お母さん、先生とかいう人たちの話ばかり聞かされてきて、それもまあ結構ですが、つまり *outer reality* に対して非常に結構に適応できるけれども、一番大事な天啓に対して耳を閉じているわけです。

これは、心理学でならわれたと思いますが、仕事への逃避です。これは怠け者の逆をいつている人です。よく仕事をしているようだけでも、実は仕事に逃げてるんだ。試験があれば一生懸命調べて、試験もやらなきゃいかん、クラブもやらなきゃいかん学生運動もやらなきゃいかん、朝から晩まで働いて、ものすごく充実して生きているような人というのは、必死にうわべ

の生活を充実することによって内面生活を収縮させている人、そういう人を仕事へ逃避しているというのです。だから何にもせずに朝から晩まで下宿でぶらぶらして、学校へもでて来ない人というのは、よく内面に耳を開いている人で、またそういう人はともすると外面の方には耳を閉じています。(笑い) そう考えますと、怠け者で成功した者は、天啓を聞いた限り動き出し、怠ける。そうですね。このしゃぐまの言った限りは実際天びん棒を持って殿さまをなぐりにいきます。この場合でもやっぱりやめとくわ、お前いつて来いやなどといってはためですね。三年寝太郎もそうで、三年という時を待っていて怠けという時に活躍します。だから、怠けという時、天啓を受けながら動かずにいると、怠けものは決して成功することがありません。特に『貧乏神』の話では、怠けものの妻に暇を出すという決意が示されています。つまり、怠けものはどこかの時点で怠けと訣別しなければならぬことを、この話は示しています。

怠けものが、今のべたような決意をすることなく、ただ単にそのときまかせの状態にのみとどまっていたら、結局のところいろいろとやってみても元のところにおさまるにすぎないことは、日本の『天にのぼった息子』という話にうまく表わされています。時間がないので、この話のことはあまり話せませんが、

興味のある人は読んでください。怠けということのなかに、いつ、どのようにして主体性を関与せしめてゆくか、というむずかしいパラドックスを解決しなくては、怠けものの意義はなくなってくるのです。

怠けものは天啓に対して開かれているなどいいましたが、天啓といういい方がきらいな人に対しては、自己実現という言葉を使ってもいいと思います。われわれが自己の実現に努力するといっても、いったいどの方向にどのようにして実現しているってよいかわからないことが多い。それが確実に把握されるまでに、そういう自己実現してゆく方向がわかれば、ただちにそれに従ってゆこうという決意をもって模索している状態、自己実現に対する非常に高いレディネスをもった状態が、怠けものであるということができます。

さて、われわれもあまり熱心に勉強して、天啓を聞く機会を失うと大変ですから、このあたりで怠けることにして、今日の講義は終わることにします。(天理大学)

★文中の日本のおとき話は、関敬吾編『こぶとり爺さん・からち』、『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』、『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎』(岩波書店)によった。